

目指せ! ネットエスパー

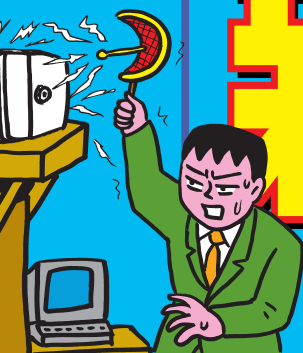


インターネット 新検索術

インターネットの中に
潜む膨大な情報
たち。そこから欲しい
ものを見つけ出し
て活用するには、

もはや1 検索サイトだけでは役に立たない。ネットの海を自在に泳ぎ、必要な情報をすぐ取り出し活用する、そんな「ネットエスパー」に変身すればインターネットの利用価値は無限大になる。この連載で「ネットエスパー」に変身するスタートを切ろう!

二木麻里(ARIADNE 運営) ariadne.ne.jp
Illust: Ebisu Yoshikazu



第4回 知らない土地の地図を探す

春だ、旅行だ、海外だ。さてどこに行こう。名前を聞いてだけで出かけたくなってしまうような、気になる地名がある。でもどこにあるかわからない。書店の中で旅行ガイド

を探しても見つからない。わざわざ地図を引くのも時間がかかる。そんなときでも、インターネットならあっという間に検索できる。しかもテキストの情報だけでなく、グラフィ

カルな地図まで表示できるのがウェブの利点だ。ある地名の町の位置を調べたうえで、その歴史やトラベル情報にまでアプローチするにはどうすればいい?

1 gooから「タラの丘」に出発

地図を広げていたら聞かれた。「“タラ”ってどこにあるかわからない?」と友人のカズ君。「もしかしたら“タラの丘”かもしれない。ケルトの古い地名らしいけど、今もあるのかな」

タラ、丘、ケルト。手掛かりはこの3つ。インターネットには地理や人類学の情報が豊富にある。ケルト関連ならヨーロッパ発信のリソースで探そうだが、スペルがわからない。それならいっそ日本語サイトで検索してみよう。まずキーワードを見分ける。タラは謎の地名だが、これだけで検索するとあらゆる「タラ」がヒットしてくるのは目に見えている。魚のタラ、たらの芽、サザエさんのタラちゃん。当然ほかのキーワードと組み合わせるのだが、さて丘とケルト、どちらを組ませるか。まず最優先するのは「タラの丘」だろう。「の」があるかないかは大きい。もし実際に地名があれば、そのもの

ずばりが出てくる可能性がある。

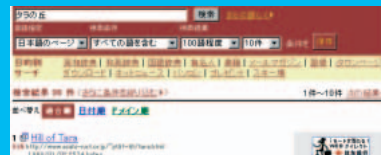
「ケルト」は比較的範囲の限られた、歴史や文化系のキーワードと言える。そして「丘」はまったく広範な一般名詞だ。だから検索の優先順位で「タラの丘」の次に来るのは「タラ+ケルト」その次が「タラ+丘」だろう。情報の分母が小さそうなほうから試す。

まず検索サイトgooに行く。gooはディレクトリーとロボットを併用しており、比較的ヒット数が絞られているサイトの1つだ。慣れなくても使いやすい。

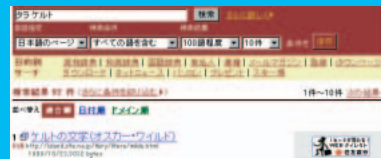
まずは「タラの丘」と入れ、素直に検索。ないだろうと思っていたら、何とあっさり出

goo
 www.goo.ne.jp
インフォシーク
 japan.infoseek.com

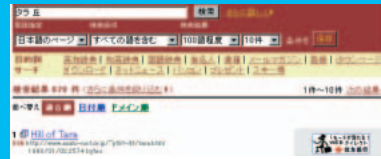
「タラの丘」で検索



「タラ ケルト」で検索

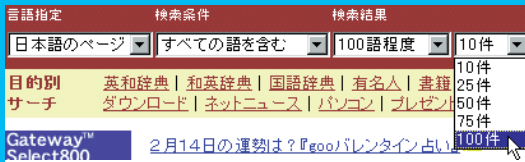


「タラ 丘」で検索



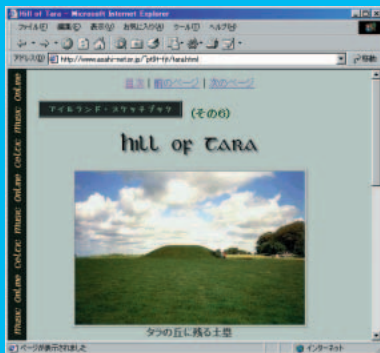
てきた。第1位「Hill of Tara」で適合率99パーセント。まさに「タラの丘」だ。全体のヒット件数はわずかに28件。ちなみに「タラ ケルト」で検索すると87件。「タラ丘」は663件になる。ついでにインフォシークを試しても結果は近い。「タラの丘」は42件、「タラ ケルト」だと89件。

こうした場合には、ざっと見渡してすぐヒットの内容をつかめるよう、表示件数は100件と多めに指定しておくと便利だ。たいがいの検索サイトではキーワードを入力する欄の近くに表示件数の指定欄があるので試してほしい。



gooやインフォシークでは、キーワード入力欄の右で表示件数を設定できる。

2 関連リソースで背景を調べる



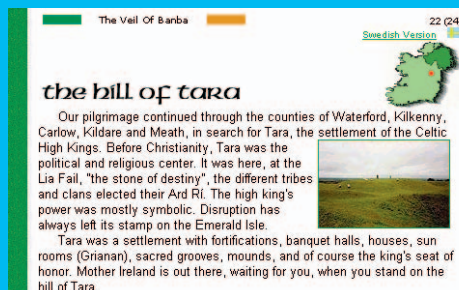
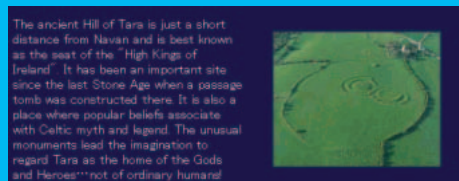
gooの検索で見つけた「ケルティック・ミュージック・オンライン」このページのリンク集をたどる。



「Fairy Tales 妖精物語」にある「ケルトの文化」「ケルトの歴史」のページでアイルランドの歴史地図が見つかった。



検索結果を見てみると、「Hill of Tara」を掲載していたのは「ケルティック・ミュージック・オンライン」というケルト音楽紹介ページの一部。写真を添えて由来が紹介さ



ノーザンライトの検索で見つかった写真。

- 上は「Meath Tourism」
www.meathtourism.ie
- 下は「Journeyman Home Page」
www.algonet.se/~arvendal/

れている。タラの丘はアイルランドの首都ダブリンから北西に約30km。西暦76年、この地でミース（Meath）の王が上王（High King）の位に就いたという。アイルランド人にとっていわば精神的な故郷なのだ。

いにしへの聖地タラ。情報の背景が調べられるリソースが見つかったときは、そのサイトのリンクページにも注目したい。関連リソースをたどる貴重な手掛かりになるからだ。たとえば「ケルティック・ミュージック・オンライン」からリンクされている「Fairy Tales 妖精物語」はケルト文化について日本語の資料を集めたサイト。歴史の項にはケルトの歴史地図もあって参考になる。もっとも栄えたのは5世紀前後で、少しずつ衰退していったこともわかる。こうした「1つの分野の入り口」をまず2つか3つ確保してしまうと、あとが非常に楽になる。

また、スペルがわかったら外国発信の検索サイトも試し、英語圏のリソースも確保するとよいだろう。ノーザンライトで「Hill of Tara」を検索すると、ヒットしたサイトの中からタラの丘を俯瞰する写真が出てきた。美しい緑が広がる航空写真だ。

- 「ケルティック・ミュージック・オンライン」
www.asahi-net.or.jp/~pt9t-fjt/celt.html
- 「Fairy Tales 妖精物語」
island.site.ne.jp/fairy/
- 「ノーザンライト」NorthernLight
www.northernlight.com

3

英語のスペルから地図を見つけ出す

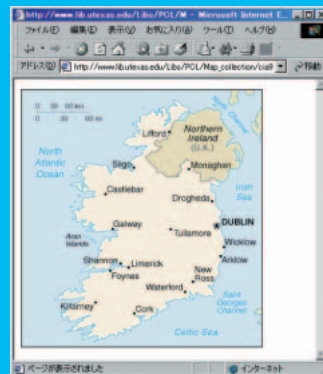
さて、これまでの情報と「Hill of Tara」というスペルを元に、現代地図も調べてみよう。たとえば「ナショナル・ジオグラフィック・マップマシン」には衛星写真による実図と政治地図が用意されており、地名で検索ができる。「Hill of Tara」では検索結果なし。「Tara」で引くと小さな画面がポップアップし、世界中のTaraが列挙される。意外なことに、地上には多くのTaraがあるのだ。「Tara, Ireland」をクリックすると、アイルランド中央付近がポイントされた。先ほど見つけた歴史地図でも現地写真の紹介文でも、タラの丘はダブリンの近くだから、どうやら別のタラがあるとわかる。これは調べてよかった。現地で間違えそう。そういえば「風と共に去りぬ」にもタラという地名が出てきた。あの物語は主人公がアイルランド系の血を引くことを背景にしていたのだ。リストに目を戻すと、アイルランドから多くの移民が渡ったアメリカ合衆国には何か所もこの地名が実在する。さらにアジアや中東にもある。世界は広い。

なお、地図を使うときにどのくらいまでズームインできるかは実用として大切だが、詳細な重いデータではなく、概観をつかむのに

適している地図もウェブには多い。そうしたいろいろな地図をリンクしているサイトを知っておくと、すぐに比較ができて便利だ。「ペリー・カスタンエダ・ライブラリー・マップ・コレクション」は世界各地の地図を豊富にリストアップしている。ABC順の国別リストがあり、たとえばアイルランドでは簡略図と比較的大きめの陰影付き地図が2種類ある。「43Kバイト」や「259Kバイト」

とサイズが示されているのありがたい。地図は詳細度やサイズによって読み込み時間が大きく異なる資料だからだ。開けてみると簡略なアイルランド全図が表示される。どこか古地図のような典雅な雰囲気がいよい。

「ナショナル・ジオグラフィック・マップマシン」
National Geographic: MapMachine
[Jump plasma.nationalgeographic.com/mapmachine/](http://plasma.nationalgeographic.com/mapmachine/)
「ペリー・カスタンエダ・ライブラリー・マップ・コレクション」
Perry-Castaneda Library Map Collection
[Jump www.lib.utexas.edu/Libs/PCL/Map_collection/Map_collection.html](http://www.lib.utexas.edu/Libs/PCL/Map_collection/Map_collection.html)



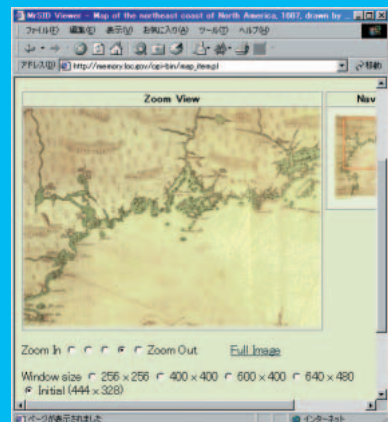
今月の「ここを探せ!!」

ウェブなら貴重な古地図も見つかる

古地図や歴史的地図はなかなか目にする事ができない。写真版で出版されてもあまりに高価だし、発行部数も少ない。インターネットでは多くの美しい古地図が無償で公開されていて、非常にうれしい。その中から、昨年米国議会図書館の地理・地図部門に追加された「国立公園地図集」を紹介しておきたい。これは議会図書館の目玉部門「アメリカン・メモリーズ」の一部でもあり、アカディア、グランドキャニオン、グレートスモーキーマウンテン、イエローストーンと4か所にある米国の国立公園を、地

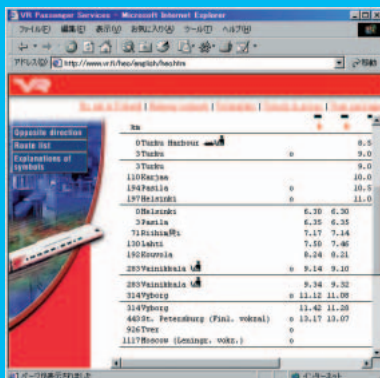
図で紹介している。ロックフェラー財団の後援によるものという。1つの地域が段階をへて「公園」になっていった過程を総計200枚近い歴史的地図で追う構成で、言葉によらない歴史を語る見事なオンライン展示になっている。地図自体は17世紀から今日の地図までにわたり多彩だ。美しい繊細な地図も多く、段階的に拡大できるよう細やかな配慮がなされている。

「国立公園地図集」
Mapping the National Parks
[Jump memory.loc.gov/ammem/gmdhtml/nphhtml/](http://memory.loc.gov/ammem/gmdhtml/nphhtml/)

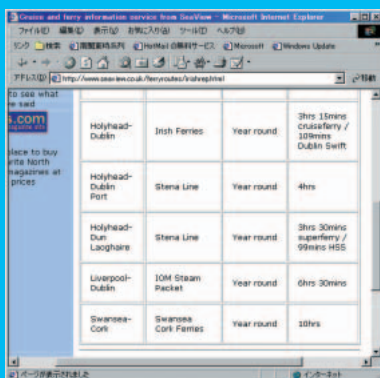


4

目的地がわかったらトラベル情報を探す



「欧州国鉄案内」からリンクされているフィンランドの鉄道会社のサイトを見ると、サンクト・ペテルブルグやモスクワへ向かう時刻表が見つかる。



「シービュー」で見つけたアイルランドへのフェリー一覧。

「じゃあタラに行こうよ」となって現地に行くとき欲しくなるのが、ツアーガイドや現地の鉄道路線図だろう。現地に着いてから探し回るのはなかなかたいへんだ。こうした情報はウェブが強力な味方になってくれる。たとえば「欧州国鉄案内」では現地の鉄道路線図や時刻表をあらかじめ調べられる。ある国を横切って別の国に入っていく欧州大陸旅行でも細かい計画を立てられるので、鉄道旅行派にはぜひおすすめしたい。サイトの表紙にはフィンランド、ハンガリー、ギリシアなど国別の発信源が直接リンクされている。それぞれ個性があって、早くも旅が始まった気持ちになる。

また「ヘイスティングス1066カントリー」には、ホテルや観光案内、欧州各国のフェリーなどさまざまな情報へのリンクがあり、これが使え。表紙にある「Selected Travel Links and Online Timetables」から船便の情報などもたどれる。「Ferry Routes for the UK & Ireland」をクリックすると船旅のサイト「シービュー」に飛ぶので、「Irish Republic」の項を見てみよう。ダブリンには飛行機で直行できるが、地図で見るとわかるように海に面した都市

であり、船で入るルートも4通りほど紹介されている。リバプールからだとIOM 蒸気船で年中便があり、所要時間は6時間30分。

欧州旅行ならこうした現地情報で十分という人も多いだろうが、日本語の旅行案内としてichou「Yahoo!トラベル」を挙げておこう。ホテルや航空各社の案内のほか、上に挙げた鉄道旅行についても日本人向けに予約の仕方や列車の乗り方まで丁寧な解説を添えている。「ダブリン」で検索すると、東京を午前中に出て、現地夜にダブリンに着くツアーがヒットした。時差があるとはいえ朝東京を出ると夜ダブリンなのかと、一瞬あわてる。ネットで現地のホテルを予約しておき、1泊して翌朝タラに出かければ、出発した次の日にはケルトの聖地に立てるのだ……タラの丘がにわかに現実味を帯びて迫ってくる。行ってみたい。

「欧州国鉄案内」 European National Railways and Timetables
[Jump mercurio.iet.unipi.it/misc/timetabl.html](http://mercurio.iet.unipi.it/misc/timetabl.html)
 「ヘイスティングス1066カントリー」 Hastings and the 1066 Country
[Jump www.baysights.com/hastings/](http://www.baysights.com/hastings/)
 「シービュー」 Cruise and ferry information service from SeaView
[Jump www.seaview.co.uk](http://www.seaview.co.uk)
 「Yahoo!トラベル」
[Jump travel.yahoo.co.jp](http://travel.yahoo.co.jp)

5

今月のポータルキット

検索サイトの違いはよく話題になるけれど、キーワードの性質はそのときごとに自分で判断するしかない。たとえ同じ言葉でも「いま何を調べたいか」によって優先順位は変わるからだ。ケルトの歴史を知りたいのか、地名と位置を知りたいのか。アクセスする前にちょっと手元でキーワードを整理し、専門用語などと組み合わせた検索順序を決めてから検索するとずいぶん違う。なによりアクセス中に焦らないですむ。手掛かりができれば、できるだけ早く「その分野のゲート」いわゆるポータルを探そう。最初から

小さなサイトをいくつもさまよい歩くより、まずは大きめのしっかりしたサイトを「島」にする。そこから探しに出て、また戻る。これなら迷子にならなくてよい。

1 導入	汎用検索サイトでキーワードサーチ
2 調査	ケルト文化リソースで背景を知る
3 確定	地図で位置を調べる
4 行動	現地移動手段・宿泊を確保
応用	歴史と文化を深く知る

二木麻里(ふたきまり)
 上智大学外国語学部卒。ライター・翻訳家。社会・人文科学系の国内外資料を案内した総合サイトARIADNEを運営。自著に『思考のためのインターネット』(筑摩書房ちくま新書)など。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp